

■ 授けられている力 ■

紀元前5世紀のことだ。カルタゴはシラクサ(シチリア)に進攻した。しかし、戦争中に疫病が発生、カルタゴは撤退を余儀なくされた。8年後、カルタゴは新鋭の傭兵で再来寇した。シラクサ防衛軍は前の戦役を担った老兵が迎撃した。そこに同じ疫病が発生、カルタゴ軍は壊滅したが、シラクサ側は病気にならなかった。

これが「免疫」という現象の人類初の記録とされる、と昨日の新聞のコラムで知った。病原菌から身体を守る免疫というメカニズムは生まれたときから人間に備わる。その力をがん治療に活かす道を拓いた功績に対して、京大の本庶佑特別教授(76)が今年のノーベル医学生理学賞を受賞することになった。

本庶特別教授の研究は、外科治療、化学療法、放射線治療とは異なる第4のがんの治療法。免疫細胞は攻撃力もあるが、ブレーキも持つ。正常な細胞を攻撃しないためだ。がん細胞は攻撃してくる免疫のブレーキを踏もうとするが、それを阻害することで、本来免疫が持つ力でがん治療を可能にするというものだ。既に『オプジーボ』という薬が、がん患者を救い始めている。

免疫のどこがすごいのか。一度加えられた危害に対処できる場所もすごいだろう。でも、驚くべきは、人体がそのすごい能力を生まれながらに授かっていることだ。

「重いがんから回復した患者から『あなたのおかげ』と言われると、自分の研究に意味があったと実感し、何よりもうれしく思います」。記者会見では医師を志した原点が見えた。また、少年や若者へは「研究は、何か知りたいという好奇心がないといけない」「不思議だと思ふ心を大切にすることだ」と語った。

「子供が誕生した時、母親が妖精に、我が子に一番役に立つものを授けてくれるように願うとしたら、その贈り物は、好奇心であるべきだと思います」。フランクリン・ルーズベルトアメリカ大統領夫人エレノアの言葉を思い出す。好奇心に誘われ、人は未知の世界へ向かう。そのときのワクワク感がたまらない。

2学期中間試験の1週間前である。興味が湧けば勉強は楽しい。与えられた範囲を学習しながらも、面白いと感じたことを大切にしていってほしい。好奇心は誰もが持っていると思う。きっと妖精たちは誰にも平等にその心を授けてくれている。

1年の折り返し地点を過ぎた。生徒の中には往路をうまく走れなかった者もいるだろう。うまくいかなかったことを次のバネにする、倒されても倒されても立ち上がる、そんな生徒を思い描きながら書いている。好奇心と同様、人間には体だけでなく心にも免疫力が授けられているはずだから。